

東海地域(愛知・静岡)出土の和同開珎

岩名 建太郎

1 はじめに

2000 年秋、出土銭貨研究会第 7 回研究大会開催に伴い、東海地域についても古代銭貨出土遺跡の集成が行われ、愛知・静岡両県では、合計 23 遺跡が報告された。この内、和同開珎出土の遺跡数は、8 遺跡に止まったが、その後、発掘報告書発行、現地調査成果のマスコミへの報道提供、見学会資料配布等により、新たに 6 遺跡が追加されることになった。これら新規の事例の大半が、現在、整理作業の途中にあるため、最終的な報告書刊行時に出土環境等の所見について、変更が生じる場合もあるので、予め留意されたい。

なお、当該地域において、いわゆる古和同及び和同銀銭は、確認されていない。

2 出土例の分布傾向

東海地域(愛知・静岡県/旧尾張・三河・遠江・駿河・伊豆)の和同開珎出土例は、管見のところ、14 遺跡 40 枚分と、他の古代銭貨の出土件数と同様、この地域の古代寺院・官衙・集落に対する発掘調査事例数に比して、極僅かである。

この傾向は、当該地域で特に例外的な事例とも言える 1 遺跡 1 遺構内での複数枚検出例(市道遺跡、深谷遺跡)と、埋没年代が中世以降に比定されるものを除けば、比較的畿内に近い尾張、三河、遠江において顕著であり、現段階において、東海西部は、和同開珎出土について過疎的な空間と認められる。

2000 年の出土銭貨研究会研究大会の際に、須田久仁彦氏が東海道の古代銭貨の出土傾向をまとめたおり、「建物跡から出土」する関東と、しない東海の地域差があるとの報告がなされたが、このシンポジウム以降、静岡県内で新たに追加された報告や、発掘担当者等への取材で得られた新情報には、建物跡からの検出事例が多く、その西限も、遠江まで及ぶことから、必ずしも地域差として捉えられない可能性が強くなった。

3 出土遺跡の性格

寺院・官衙跡に直接的に関わっていたとみられる事例は、豊橋市市道遺跡、袋井市坂尻遺跡、静岡市駿河区神明原・元宮川遺跡の 3 遺跡が該当する。

市道遺跡は、8 世紀から 14 世紀前半にかけて存立していた寺院とその周辺建物群からなり、その中の土坑(SK-28)から 7 枚の和同開珎が検出したものである。同土坑覆土からは、土錘も出土しているが、銭貨との共伴関係は、不明であり、具体的な年代の確定は、難しい。

坂尻遺跡は、古墳時代から近世までの複合遺跡であるが、古代面で、大量に出土した墨書土器

の中に、「佐野厨家」、「日根駅家」、「駅長」、「駅子」と記したものがあつた。帯金具、銅印、分銅、齋串なども出土し、溝状遺構（NSD 3・4）の出土遺物中に和同開珎が3枚含まれていた。

神明原・元宮川遺跡は、古代大谷川の流路にあたり、その右岸側に人形・馬形木製品、齋串、ト骨、石製模造品などの祭祀遺物が大量に出土した。和同開珎もまた、こうした旧河道からの検出であつた。

坂尻遺跡と神明原・元宮川遺跡の和同開珎出土例は、郡家単位で行われる水辺での祭祀行為に伴つた銭貨の投棄行為の結果と目される。

集落跡に伴う事例は、浜松市若林Ⅲ遺跡、掛川市八坂別所遺跡、静岡市清水区宮道遺跡、富士市宮添遺跡、沼津市千本遺跡、駿東郡小山町横山遺跡、伊東市井戸川遺跡の8遺跡が該当するが、これらの遺跡では、瓦、墨書土器、帯金具などが出土する場合が少なからずあり、間接的に官衙と関わっていると見える。

この内、住居跡内からの出土例があるのが、若林Ⅲ、宮道、宮添、横山である。千本は、和同開珎の出土が包含層からであるが、神功開寶、隆平永寶それぞれ1枚が住居内から出土している。横山の場合、10世紀代に比定される10軒の竪穴住居の中で、最も小形の住居（SB207）から、和同開珎のほか、寛平大寶も1枚出土した。なお、平安時代中葉の竪穴住居10軒中8軒で灰釉陶器が出土しているが、緑釉陶器が出土しているのは、SB207のほかは、1軒だけである。

駿河東部の和同開珎を出土している遺跡の周辺には、宮添遺跡の西北西約6km先に東平遺跡、千本遺跡の東北東約1.5km先に御幸町遺跡、同じく北東約2.5km先に下石田原因遺跡といった、経営年代を同じくする、住居跡軒数などの全体的規模は、比較的大きいものの、古代銭貨を出土しない集落遺跡が存在する。

宮添や千本がこれら大規模集落に対し、銭貨の流入・獲得で有利な面を持っているとすれば、想定される当時の交通路に近い立地にあつたことが挙げられる（駿河東部、現沼津市西部浮島地区は、近代に至るまで深い湿地帯で、古代東海道のコースも、愛鷹山の裾を行くものと、水上交通または、海浜部を行くものが考えられている）。

そういう意味では、古代東海道と思しき道路状遺構が検出された八坂別所遺跡や伊豆東海岸の井戸川遺跡についても同様のことが言え（伊豆の内陸部では、国府のあつた三島市域を含め、古代銭貨が出土した遺跡は、皆無であり、海上交通によって、和同開珎がもたらされたと考えられる）、この地域における平均的な古代銭貨の受容と活用（住居の廃絶に伴う祭祀の道具か？）の範囲は、一部の通過交通量の多い集落内で完結されていた可能性がある。

掛川市深谷遺跡の事例は、先述の通り、この地域にとって、例外的なものである。丘陵上に設けられた、径約40cmの柱穴の一部を掘り込んだと解釈される土坑に白銅鏡2面（唐花含綬双鳳八花鏡・花枝双鸞八花鏡）と和同開珎19枚を納めたもので、地鎮・鎮壇に類する祭祀が行われたと見られるが、柱穴の並び（＝建物）は、抽出できなかつた。

埋納状態の詳細は、北側に唐花含綬双鳳八花鏡、南側に花枝双鸞八花鏡を並べ、それぞれ南へ表面を向けた状態で間に8枚の和同開珎を挟み、唐花含綬双鳳八花鏡の背面側（北側）に大麻に包んだ11枚の緡状にした和同開珎を入れている。

この埋納遺構の南東約 10m 先では、奈良時代前半に比定される土坑墓（長径約 1.7m、短径約 0.8m の長方形を呈す。その南端から、土師器皿 2、須恵器杯蓋 1、長頸壺 1、刀子 1、鉄鏃がまとめて出土）が検出されている。

埋没が中近世以降に推定される事例は、小牧市北外山出土銭、静岡市清水区龍伝寺谷出土銭、富士宮市北山出土銭の 3 事例が該当する。北外山は、性格不明、龍伝寺谷は、幕末から明治にかけての好事家の収集品の隠匿、北山は、中世の大量銭である。

4 おわりに

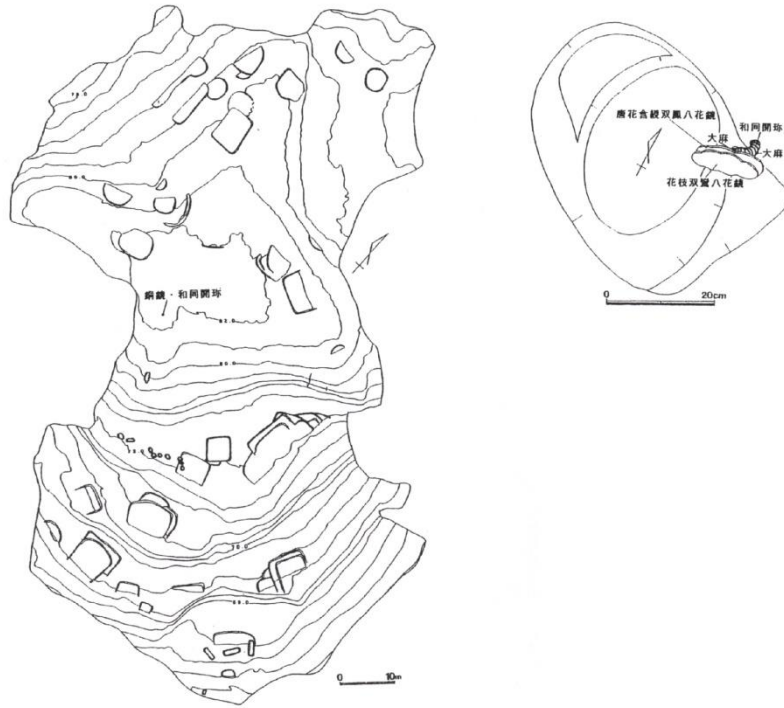
貨幣本来の活発な経済活動による流通の痕跡を見出し得る事例が無い。また、埋葬に伴う事例も見当たらない。積極的な受容要件が無い中で残された銭貨の性質をこの地域では、考えなければならない。

〔引用・参考文献〕（出土例一覧表に記載されている分については、割愛する。）

掛川市市史編纂委員会編 2000 『掛川市史』資料編 古代・中世 掛川市

須田久仁男 2000 「東海道」『畿内・七道からみた古代銭貨』 出土銭貨研究会

静岡県教育委員会編 2003 『静岡県の古代寺院・官衙遺跡』 静岡県教育委員会



第3図 掛川市深谷遺跡遺構配置図及び鏡・銭貨埋納土坑

(※図中に見える竪穴住居跡は、弥生時代後期から古墳時代中期に比定され、鏡・銭貨とは、時代的に噛み合わない。)